

それから四十年近く経った、戦後五十年目の元旦である。

年齢^{よわい}八十二になる秀次郎は、この朝、ほこらの前で涙を流した。久しぶりに内から立ち上がる思いと向き合ったのだ。

ふりかえれば、自分たちを見限ったものへ意地を張り続けた五十年だった。晴れない気持ちの中で般若心経を唱え目をつむった拍子に、涙が痩せた頬を伝わり落ちた。と、秀次郎のまぶたにはヤルートで自決した杉山喜八少将の温顔が浮かんだ。

五十年が経っていた。

不意に浮かんだ少将の温顔がひどくありがたかった。そのせいなのか泣くと、少しせいせいした。

秀次郎はコートのポケットから防寒用の頬かむりに使っているタオルを取り出し、涙をぬぐい鼻水をふいた。

登山道を下りながら、元少佐は杉山閣下の温顔が拝めたことを不思議に思った。何かの吉兆だろうか。

路地へ出ると、いつもの角を曲がらずに遠回りをし、元旦の空が白みはじめた頃、家に帰った。

ラジオを聞きながら、普段どおり一時間余り新聞に目を通す。それからおもむろに、妻と屠蘇^{とそ}を飲み交わしゆっくり雑煮を食べた。

ここ十数年来、年始の客はぱったり途絶えている。届く年賀状もめっきり減った。

松山にきた当初、元少佐は全国に点在する戦友や部下とその遺族へ努めて賀状を差し出すようにしていた。その頃、受け取る賀状も5百枚は越えていた。しかし、ここ十数年、かれは受け取った賀状にだけ返礼をしたためるようになった。年を経るにつれ喪中の挨拶状も増え、ここ数年、届く賀状は百枚をやつとこえるほどだった。

しかしそれだからこそ、賀状を読むのは余計に愉しみだった。届くのは昼ごろだから、それまで寝ることにしている。

三畳の押入れから布団を取り出して六畳へ運ぶ。六畳はなりわいに行っている整体の仕事場なのだが、三が日は休みで客はこない。妻が台所で洗い物をする音を聞きながら、六畳で老人は今年もひとり、ゆっくり寝正月だった。

日ざしが、窓のすりガラスに映えていた。

ながめていると、鉄格子の小さな窓を見つめてすごした巣鴨プリズンの十年間がきれぎれに元戦犯の脳裏をよぎる。

それはみないまは幻のようにゆらめくばかりである。そして、やがては秀次

郎の人生とともに消え去っていく。それでよいではないかと老人は思うことが多くなっていた。しかし、すべてがそれでよいわけではない。

目を閉じ、ひらひら舞い落ちる記憶の断片を追いかけながら、秀次郎は十三号鉄扉の前で手をあわせる仲間の戦犯たちの群像を思い浮かべていた。

志村秀次郎も何度か、「13」と記された扉の前に立ったことがある。この鉄扉の奥の十三階段をのぼり、巣鴨だけでも六十名の戦犯が刑場の露と消えたのである。

そして、芳野順造もその中のひとりであった。芳野は志村がフィリピンのビガンの大隊長をしていた時の副官だった。

志村の大隊は昭和十八年九月に中部太平洋の守備隊に再編され、大隊長はマーシャル諸島のヤルートへ転進したが、芳野はマニラにある捕虜収容所の庶務主任に配属されフィリピンへ残った。

芳野は志村がヤルートへ発つ前日に大隊長室へ挨拶に訪れ、ご一緒できないのは誠に残念です、と目に涙を浮かべた。感傷を嫌う志村は窓外へ視線を移し次のように督励した。「捕虜収容所勤務は、いまこそ恩讐をこえた武士道が大切だ。教師をしていた君にはやりがいのある任務ではないか。誠心誠意勤めてもらいたい」

芳野は直立不動のまま謹厳実直な大隊長の言葉を聞き、答礼した。

あの時、もっと別な言葉をかけてやればよかったと秀次郎は芳野のことを思い出すたびに思うのである。捕虜収容所勤務がどんなに割りの合わない任務か、お互いによくわかっていたのだ。

懸念したとおり、芳野はその後不運としかいいようのない事件にかかわり、戦後の昭和二十一年三月、入院先の国立善通寺病院から巣鴨に送られた。そして横浜軍事法廷は芳野に対し、捕虜斬殺を命じた罪で絞首刑を宣告したのである。

その事件というのは、昭和十九年十二月に起った。

芳野は比島に残っていた米・英・蘭の捕虜千六百余名を日本へ輸送するおうりよく鴨緑丸の護送隊長に選ばれた。

船がマニラを出港したのは十三日である。しかし、四時間後に米軍機延べ百三十機の爆撃を受け、鴨緑丸は航続不能となった。一行はオロンガポに上陸し、二十四日までここに待機。その後、南フェルナンドへ全員移動し、二十七日に帰国する二隻の船へ捕虜を分乗させて再び日本へ向け出港した。

日本の門司港へ着いたのは昭和二十年一月三十日のことで、マニラ出港から数えて四十九日の間に爆撃と寒さや食料不足それに衛生状態の悪さなどで、一千名をこえる捕虜が途中で死亡するという悲惨な結果になった。

芳野はこの事件の中で、比島捕虜収容所本所長^{こうしよく}洪思翊中将の伝達命令を受け、護送が困難になった重傷捕虜十五名を部下に命じて南フェルナンドの墓地で斬首させ殺害した罪で死刑の判決を受けたのである。

刑の執行は昭和二十三年八月十九日であった。同じ巣鴨に服役していた志村は芳野の処刑を三日後に新聞で知った。

戦後五十年経った今日でさえ、芳野のことを思い出すと秀次郎は胸苦しさを覚える。ところが、芳野の妻の政江はこの点で情に流されず、きわめて理知的な女性であった。

政江がいきなり秀次郎を訪ねてきた日のことはいまも忘れがたい。それは、かれが松山へ来てすぐのことだった。

その時、初対面の未亡人がいった言葉が、元戦犯の胸をついた。彼女は本を朗読するかのような口調で次のようにいったのだ。

「県内出身者の戦犯で、非道な裁判により死刑の判決を受け、^{さんげ}散華した殉国の烈士は二十二名になります」

これは何事かと、生きて巣鴨を出てきた秀次郎はたじたじとなった。

だが、これだけいうと、政江はすぐ表情をなごませた。そして今度はおだやかに、わたくしは巣鴨の^{きょうかいし}教誨師花山信勝先生から夫の最期の様子を教えていただき、やっと迷いを断つことができました、と芳野が処刑された当時の心境をぼそぼそと口にした。涙はなく、気性の強さでのりきったのか、さばさばしている。それから話は彼女のことだけでなく、処刑された二十二名の遺族がおかれたみじめな暮らしぶりへと移った。

政江はその当時、まだ三十をこしたばかりの年ごろにちがいがなかったが、亡き夫のあとをついで神職をしている人らしく、言葉にどっしりと重みがあった。

ふと気づくと母親の背中にかくれるようにして、少女が心ぼそげに立っていた。波津子が気づかってありあわせの駄菓子かなにか、少女にもたせようとしたが、娘がかたくなに拒むすがたがいまも秀次郎のまぶたに焼きついている。

政江の用件は、遺族会をつくりたいから力になって欲しいということであった。



挿絵 (N. Takeda)

断る理由はなかった。秀次郎は遺族会の相談にのることになった。

そんなおり、政江に同行して佐礼山^{されやま}という山奥の集落に住む婦人を訪ねて行ったことがある。政江は戦犯のことで、気になる手紙をその山村の農婦からもらっていた。

ところがどうした行きちがいか、訪ねた農家は空っぽで、引き戸からのぞくと土間には大きな西瓜がいくつも転がるばかりである。座敷の奥へ声をかけてみたがしんとして人の気配がない。みんな山仕事へ出かけ留守であった。

それでぬれ縁に並んで腰をおろし、緑にけむる山や田畑をながめて家人の帰りをしばらくは待っていたのだが、帰りのバスが出るというので、軒先に置き手紙をしてひきあげたのだった。返事を待っていたがその後、何の音沙汰もなかった。

もう一度こちらから便りを出せばよかったのだろうが、その頃遺族会は護国神社へ慰霊碑を建てる計画で忙しく、この件はいつの間にかうやむやになってしまった。

政江の話では、手紙には「戦犯事件」のスタンプはいつ無くなるのだろうか、と尋ねてあったという。必要があつて戸籍表を役場から取り寄せる度に、「戦犯事件」と朱色のスタンプが押されているというのだった。

政江は佐礼山へ行く前やその後にも、知り得る限りの戦犯関係者にこの件で問い合わせをしている。しかし、そのような事実を指摘する者はひとりも現われなかった。佐礼山村だけにかぎったことなのだろうか。真相は不明のままであった。

四年前の冬、がんで死の病床にあった政江を見舞ったときに、彼女はどうか三十年以上も前のこの話を志村にもちかけ、退院したらもう一度あの山の村へ行ってみようと誘ったのである。

平家の落人部落だどつたえられる佐礼山村にも、戦後五十年の歳月が流れている。

あるときながめた佐礼山のたおやかな山容にも初日^{はっぴ}があたっていることであろう。

その情景をあれこれ思い描いているうちに秀次郎は寝息をたてていた。

昼下がり、珍しく年賀の客があつた。

玄関に顔をだすと、中田大助がぱりっとした背広姿で立っていた。中田はヤルート守備隊時代の志村の部下で、去年の春まで自分が経営する幼稚園の園長だった。ひまができたので一念発起し「お節^{せち}」をつくった、と手にした重箱を

上げてみせる。

さっそく酒宴になった。

ところが、酒を酌み交わすうちに大助が妙なことを言い出した。

それは、夢の話だった。

夢の中で、かれはヤルートで行方不明になったままの松岡中尉に会ったという。

「普段は忘れとって、頭の中にはちゃんと入ってるからえらいもんです」

と大助が松岡のことをいった。

二人は幼なじみでもある。

秀次郎は天井へ目を上げ、押し黙った。

「夢の中のことですから」

と大助は気づかう。

「生きてましたか」

「はい、元気でした」

と大助ははずむように応えたが、秀次郎は箸を止め、客から窓へ視線を移した。

松岡が行方不明になったのは敗戦の年の三月である。米空軍パイロットの捕虜三名が逃亡を企てる事件があり、かれらは間もなく全員捕まったが、三名に拉致された松岡の行方がわからなくなったのである。

捕虜の処分方法をめぐって、杉山司令と志村大隊長の間意見の食い違いが生じた。松岡の生死がはっきりするまで、司令は刑の執行を見合わす意向だった。志村は司令の意見に服したが、一月経っても松岡の生死がつかめず、島内の治安維持と将兵の士気を重視する志村ら陸軍将校に押し切られ、捕虜三名の処刑が執行された。司令所内で行なわれた裁判の判決事由は逃亡未遂と松岡中尉殺害だった。

「ええ夢を見させてもらいました。夢であれ生きとって欲しい男やから」

大助は空の杯に手じゃくで酒を盛った。

秀次郎はまだ窓を見ている。

大助は口の中のカマボコを酒と一緒に喉の奥へ流し込んだ。

少し、酔いが回った感じがした。

「どこで会うたと思います」

秀次郎は向き直った。

「あんたの夢の中のことまでわからんよ」

「それが、意外なところでした」

と大助は声を低くした。

「まあ、もういいじゃないか」

秀次郎はさえぎった。

「すいません、つい……」

「なに、あんたのせいじゃない」

秀次郎は客に酒を注いだ。

大助はかしこまって杯を受ける。

秀次郎は少し悪い気がした。

志村がヤルート時代のことを率直に語れる相手は中田だけであった。志村を松山へ招くとき中心となって働いたのも中田である。

しかし、その中田とさえ松岡のことを口にするのは気がすすまないのである。

「いよいよ出かけますか」

と秀次郎は話題を転じた。

大助がここ一年がかりで準備してきたヤルート墓参のことである。日本へ持ち帰れなかった遺骨を収集し、慰霊碑を建てるのがここ数年来のかれの悲願であった。

ところが、これが藪蛇になった。

大助は杯を置いた。

「はい、どんなことがあっても行きます」

「えらい決意だね」

「志村さん」

大助は改まった。

「松岡は本当に生きとるかもしれんです」

「それは、そうあって欲しいが……」

「正夢ってこともあります。自分は松岡とヤルートで会える気がするんです」

秀次郎は顔をしかめた。

杯の酒を喉元へ流し込む。ふらっと立ち上がって、^{かわや} 厠へたった。

甘党の大助は、飲みたくもない酒を二度三度口に運びながら、かつての上官が現れるのを待った。秀次郎が嫌がることを口にしたのは、春に出発が決まったヤルート墓参のことが頭にあったからだ。その上、そのヤルートで松岡に会った夢を見、気持ちが舞い上がっているとかれは自分を分析した。

